豪雪協は森を育てるだけではなく人も育てる

箕口　秀夫（新潟大学農学部）※

持続的な森林管理には、森林を構成する樹木の世代交代と次世代木の育成が必要不可欠です。そのため造林・育林技術の肝は今も昔も更新技術です。このことは組織の人事管理にもあてはまります。私自身も豪雪地帯林業技術開発協議会（豪雪協）で芽を出し、育てられてきました。そこで、ここではその時代背景、経緯などを振り返ります。

豪雪協では、これまで3冊の豪多雪地帯における森林造成管理の専門普及書を発刊しています。昭和59（1984）年発刊の「雪に強い森林の育て方」、平成12（2000）年発刊の「雪国の森林（もり）づくり」、そして平成26（2014）年発刊の「広葉樹の森づくり」の3冊です。これら3冊は、それぞれの時代背景のもと、森林施策の方向性を反映した研究テーマの変遷を色濃く映し出しています。そこにはいかんともしがたい積雪環境に、それぞれ「抗う」、「耐える」、そして「往なす」の森づくりの思想をみてとることができます。

豪雪協が各県研究機関の研究員で構成されている以上、構成員が入れ替わるのは必定です。しかし、上記の3冊を発刊し続けることができた経緯を考えると、研究テーマは変遷していきますが、一時間断面では、ひとつのテーマに複数県の研究者がチームとして時間をかけて真摯に取り組んできたことがわかります。そして、それらの研究チームを豪雪協の第1世代、第2世代、そして第3世代としてとらえることができます。「雪に強い森林の育て方」の発刊に関わった山形の佐藤さん、新潟の野表さん、富山の平さん、岐阜の山口さん、そして福井の松田さんらに代表される創世記の第1世代。「雪国も森林（もり）づくり」の発刊に関わった山形の小野瀬さん、富山の長谷川さん、石川の小谷さん、岐阜の横井さん、そして鳥取の前田さんに代表される黎明記の第2世代です。

私は、第2世代の端くれとして、新潟県林業試験場研究員の立場で昭和61（1986）年から平成8（1996）年までのちょうど10年間、豪雪協に関わらせていただきました。そして、豪雪協を離れてからも、皆様のご厚意により「雪国の森林（もり）づくり」の執筆を分担させていただきました。

当時、ちりぢりに各県に分かれて活動していた第2世代のメンバーが一堂に会する機会は年3回ありました。一つめは、各県持ち回りで開催されていた豪雪協の会合です。この会合では、幸いなことに第1世代の方々にもまだご参加いただけ、多くのアドバイス、励ましをいただきながら、現地も含めてテーマを絞り込んだ本音の議論をすることができました。二つめは、森林総合研究所（森林総研）で開催されていた国の大型プロジェクト研究の打合せです。この打合せでは各県との情報を共有することはもちろんのこと、メンバーの多くが研修でお世話になった森林総研群落研究室の谷本さん、桜井さん、鈴木さん、中静さん、そして田中さんなど関係研究分野の第一人者と酒を酌み交わしながら、夜を徹し議論をする機会となりました（その結果、2日目の会議は多くのメンバーがずっと下を向いていることになりました）。そして三つめは、日本林学会（現：森林学会）の本大会です。

今では都道府県研究機関の研究員が森林学会の本大会に参加，発表することはごく当たり前のことです。しかし、当時の林学会（森林学会）では都道府県研究機関の研究者は林学会の地区会で発表し、本大会で発表することは一部の道県を除きごく稀でした。正直なところ、地方林試研究者が本大会で発表することはタブー視されていた感もありました。これに対し、私たち第２世代は、全国大会で積極的に発表，勝負？することを誰がいうわけでもなく実践してきました。“ Think globally, act locally ”といわれて久しいですが、県という地域に軸足をおいて活動はしますが、全国的な、さらに世界的な知識、情報、そして視野をもちたいと皆が考えていました。また、実際に参加できたのは、自分たちの研究に対する自負はもちろんのこと、当時の職場上司であった第１世代の方々の理解と後押しがあったからに他なりません。こうして参加するようになった全国大会では、それまでの一地方林試という枠組から、国研、そして大学を包含する枠組での交流、情報交換を行うことで、大きな刺激を得ることができました。これらの刺激は、自身の研究を再認識するきっかけとなり、それまで研究者としての矜持の中でくすぶっていたものに火をつけることになりました。それは博士の学位取得です。

「博士号とかけて、足の裏についたご飯粒ととく、そのこころは・・・」「とっても食えない」と言われています。しかし、自分自身の振り返りのなかで、過去の研究を活かし、今の研究に集中し、そして未来の研究を紡ぎ出すためのひとつの手段として、多くの第２世代が学位取得を考えるようになりました。ここでも、幸いなことに、私たちの意志、考えを理解してくださる大学関係者の応援を得ることができました。これも学会の全国大会にきちんと参加するなどの情報発信を行ってきた結果といえます。その結果第２世代では、私も含め、小谷さん、長谷川さん、そして横井さんの４名が博士の学位を取得することができました。あまり良い例えではありませんが、１ 人で一升酒を飲むことができなくても３人、４人が集まって宴を張れば３升、４升以上のお酒を飲むことができる、そんなのりだったのかもしれません。特に私を除く３名の皆さんは、当時第２世代が一途に取り組んでいた「広葉樹を活かした不成績造林地の管理」をテーマに学位論文を仕上げました。不成績（林）ドクターの誕生です。もちろん学位は研究者の免許証のひとつであり、取得することは目標や目的ではなく手段です。それでも、学位取得のプロセスで有形（例えば論文、調査地）、無形（例えば人間関係、自信）の財産を得ることが出来たことは間違いありません。この豪雪協でのキャリア、なによりも第２世代のメンバーとの交流は、当時と変わらず、今でも私の大きな支えです。

最後に、執筆の機会をいただいた第３世代の皆さん、特に同じ第２世代コホートでありながら引き続き豪雪協を牽引しておられる小谷博士に心から御礼申し上げます。豪雪協がこれからもグローカルで魅力的な研究チームとして機能し、第４世代、第５世代へと発展することを祈念いたします。

※著者近況

1996 年に新潟県林業試験場（現森林研究所）から新潟大学に移り、現在は自然科学系（農学部）教授。森林生態系における生物間相互作用の解明、豪雪地帯における生物多様性を意識した森林管理技術の開発などを研究。最近では研究対象が小さな野ネズミから大きなツキノワグマやニホンジカに変わっ

てきている。学部教育では「保全生態学」、「森林保全学」などを担当しているが、森林生態系サービスの視点から林業の重要性を理解してもらえるよう努めている。博士（学術）。